

近代化の風景

——環境認識の地域社会学——

井戸 聡

0 はじめに——生活者の内的イメージから——

現代農山村社会における社会問題は多岐にわたる。農林業問題、担い手問題、地域医療、過疎、地域格差など、数え上げればきりが無い。こういった課題に取り組み、苦闘している地域社会は全国に見受けられ、またこうした問題に解決の糸口をも何ら見出すことができず、悄然と事態のうねりに身を任せるままにある地域が多いことも事実である。

こういった問題に取り組む主体のひとつとして、行政が挙げられるだろう。例えば国は、第五次全国総合開発計画を企画し、これまでの都市開発主導型に偏っていた開発精神を改め、地域社会を開発の焦点に持ってくるという方向転換の姿勢を打ち出している。また地方行政でいえば、それぞれの地域での開発計画を策定して、地域社会の特性を踏まえつつ、発展を促すという方向で、事態の改善を企図する自治体が多い。

しかし、実際に農山村を尋ね歩いてみると、人々の口から漏れてくる言葉のなかには、地域の将来に対して明らかに諦観の念が横たわっていることを感じざるを得ない語りがいくつもある。

人々が、問題解決への取り組みに対して悲観的になるのは、そうした取り組みの有効性を疑問視しているためである。なぜ疑いのまなざしを投げかけるのか。

端的に言えば、経験がそう仕向けるのである。つまり、これまでに試行された地域社会の社会問題に対する解決への取り組み、地域社会の建て直しに向けての試みがことごとく失敗してきているという経験が人々のなかにあるからである。

無論これは、人々の心性のなかにあるイメージについての話しである。取り組みによってはある程度の成果を上げているという評価がなされているものもある。また、地域の再建をはかる試みに主体的に参加している人々のなかには、こうしたイメージを持たないように感じられる人々もある。しかし、ここで注目すべきなのは、そうした好意的評価を与えられている多少の事例もありながら、総じてみると否定的な感懐に落ちついてゆくという多くの人々の内的な動向にある。

ここで論じられているのは、こと地域社会の将来性というトピックに限っての人々の内的イメージについてである。現実そこに生活している人々にとっての生活の場としての農山村や日々の生活についていえば、そのイマジネーションは悠然としており、朗々とした日々の生活空間が内的に存在していることがしのばれるのである。

とはいえ地域の将来についての話題になれば、普段はその重圧感から逃れるべく背後に追いやられている不安感がやはり析出してくるのである。

そうした状況に接しているとき、次に浮上してくる疑問は、ではなぜ次々と提起され試行されている地域再生の試みは人々に対して積極的な評価を与えず、安心感を与えないのだろうか、何が欠けているのだろうか、というものである。

そのひとつの回答として考えられるものは、次のようなものである。

これまでに提起されてきた地域再生の試みが企画される際に決定的に欠如していたひとつの視角は、地域社会側の実情の理解である、というものである。これは特に、国や都道府県といった比較的大きな行政単位の発する地域開発計画などに顕著にみられる傾向であった。「行政は変にネジくれているが、地方への無理解という点では一貫している」と揶揄する向きもあろう。

例えば、環境社会学的分野のなかでは生活環境主義の立場から、地域の生活者の視点からの分析視角をもって、地域社会の分析と理解が進められてきた。ここで徹底されているのは、生活者の視点を通して地域社会を投影するという営為である。そこには、初期農村社会学に端を発する外からの分析視角に対置される、内部的視点からの捉え直しというそれまでの軌跡に対する反省的転換の発露がそこにはある。

こうした分析的態度の転向は、それまでの対象の理解の不十分さを露呈するものである。

以上のような対象理解の更なる必要性という基本的認識のもとに展開されるひとつの試みとして本稿が位置付けられるものであると理解されたい。

1 近代化再考——対象理解への模索——

さまざまな地域社会問題の解消に向けての営為において、問題にメスを入れ地域再生へと向かう道程におけるひとつの鍵として、先程まで対象理解の必要性を述べてきた。これについていまだ少し考えてみたい。

問題となっている地域に対する理解の必要性に対する要請はある程度、さまざまな方面で検討され、取り入れられてきている面もある。最近とみに叫ばれている「地方分権」への動きもその一例であろう。また、学術的な方面でいえば、先程述べたような生活者の視

点に依拠した研究も蓄積されてきている。

だが、これらは同時代の社会問題とし、その解消の志向性を強く持って対象を理解しようとするが為に、その歴史性を軽視する傾向を持つ。問題状況へと陥っていくプロセスや、現況を捉える営みには長じているのだが、そうした状況を用意した背景にたいする配慮に欠けている感がある。

こうしたスタンスのもとに歴史的視点に配慮し、かつ焦点を絞った試論として本稿がある。従って問題状況に至る前段階としての背景に注視し、渦中の農山村がかつてどのような社会像を呈していたのかを歴史性を踏まえて浮き彫りにしていくことに力点が置かれている。より詳細には後ほど述べることになるのだが、具体的にいうと、現在ダム問題に揺れている一農山村が考察の対象となっている。この農山村社会は30数年に及ぶダム問題の経歴を持っているのだが、そのダム問題が発生する直前から最初期あたりまでを考察の射程としている。

そこでは次のような方法が採られている。考察の対象となる農山村社会の姿を浮き彫りにする試みがこの論考の主旨であるが、その社会の構成要素である一人一人の生活者の内面的世界のひだに触れることを抜きにしては一面的な把握に終始してしまう恐れがあると考えられる。そこで人々の心性に注目する必要性がここに生じる。そうした配慮を失念することなく論を進めていかなければならないが、ここではそのためにそうした事柄を物語るような資料にあたるように心掛けられている。具体的には聞き取りや新聞記事などから得られたナラティブに依拠している。

このようにミクロな視点をもってマクロな社会像の析出を試みるのが狙いではあるが、そこでは畢竟マクロからミクロに作用する動向もみられるのであり、インタラクティブでダイナミックな関係性に対してのパースペクティブも持ち併せなければならないだろう。

こうした試みのなかで浮上してくるのは近代化の問題であろう。一農山村に劇的に到来した近代化現象に伴う社会や人々の内的な動態についての考察となる。近代化に対する批判論、超克論がかまびすしく叫ばれる今日、そうしたフレームに則った語りも生活者たちの間からは漏れ聞こえてくる。だが、近代化黎明期の農山村社会での受容の過程では、進んで近代的産物を取り入れていった姿もあらわになってくる。しかし、これは無批判的に近代化を受け入れた、または受け入れざるを得なかった農山村の近代化の甘受の姿にすぎないのだとの解釈をすべきではない。そこにはある種の統制が働いていたのであり、そのことに注目する視角を持ち併せなければならないのである。押し寄せる近代化のうねりに飲み込まれたというだけでなく、ある種のコントロールが見られたのであり、そこに進んで摂取していくという姿もあったという変換を必要とすべきなのである。人々の内部で

こういった取り込みに関する統制が働いたのか、いわば、どのような近代化の飼ひ慣らしがあったのかがひとつの焦点となる。そういった意味では、農山村における近代化の捉え直しという契機も含んでいることになる。

現在の農山村地域でさまざまな社会問題状況が発生していることは先程も述べたが、こうした課題を解消すべく取り組まれる施策や論議がこういった性格のものであるかをここでさらに考えてみたい。

例えば、全国総合開発計画などの施策から読み取れる行政や産業界の地域振興の指針は地域の産業化や工業化といった経済的な観点からの地域振興策を唱えるに終始しているといっていよう。特に1970年代までの施策においては、この傾向は顕著であり、初期の計画においては農山村に対する配慮はほとんど皆無であるといっていよう。これはもともと主要都市や地方都市の産業化を促すことによって起きる労働力不足を、農山村の余剰労働力を流入させるという意図のもとに企図された性格上当然のことであるといえよう。ただ、こうした都市社会の都合による地域社会無視のストレスがさまざまな矛盾となって生起し、特に農山村社会において徐々に深刻化し、問題状況が露呈しはじめ無視しきれないような状況になってくると徐々に言及されるようになってくる。

例えば高齢化が指摘され、高齢者対策が必要とされるが、その目的は次のようなところにあるのである。

「高齢農業者は農村の伝統的文化の継承者であり、また、長年土に親しみ、土に生きてきた人たちであり、農業に愛着を持ち、生き甲斐を感じている人も多いことなどにかんがみ、農業、農村の内部において、その能力を生かす場を確保し、開発して、明るく、豊かに生き甲斐をもって老後の生活を送れるようにすることが重要となっている。（図説農業白書 昭和50年度版 160頁）」

「農業者をはじめとする多数の地域住民の福祉の向上はもとより、時代の農業、農村を担う若い農業者や後継者の確保および農業生産の中核的担い手の定着化を図るため」というところに落ちつくのである。

つまり、農村でのひとつの社会矛盾としてある高齢化の問題の解消の目的は、農村地域での産業、つまり農業を安定維持するところにあるのだとしているのである。

また80年代後半になると地域の産業として総合保養地域整備法（リゾート法）やふるさと創生事業などの施策がなされるが、これらは地域社会内だけでは循環しきれなくなった社会において、新たな資源（自然、観光スポットなど）を発掘し、これを売りにすることによって、外部からの資源（貨幣、人材など）の流入を図り不足分を補充するという発想法なのである。

これらに共通するのは、さまざまな問題状況を経済的な尺度で計り、すべてを経済性の問題へと還元してするという点であろう。こうして経済的観点のみからの論議がなされ、経済性の問題として水路付けされた問題群は経済的観点のみからの解決策が模索されるのである。ここでは多様な要素を包摂する問題状況から、さまざまな要素が削ぎ落とされ、単一的な問題として取り扱われることになるのである。

また、一方で「田舎生活」や「田園」といった言葉に表象される農山村へのロマン主義的な憧憬が都市社会に見られるのも今日の状況の一端である。こうした状況は例えばＩターン現象やさまざまな「田舎暮らし」に関する情報の流通化現象などに端的に現れている。都市に生まれ育った者がさまざまな理由から都市での生活を放棄し、「田舎」に新天地を求めるＩターン現象。こうした現象はその数を増しており、また、こうした現象が注目されるようになってきている。田舎での暮らしの情報を扱う雑誌や、専門誌、そういった現象に焦点をあてるテレビ番組などが登場しているのである。

田園や豊饒な天然の宝庫としての田舎に対するロマンティシズム自体の登場は古くの文学作品などにも見られるものであるのだが、今日的な「田舎」へのロマン主義的なまなざし現象は規模的にも質的にもそれとは異なるものであり、ひとつの現代的社会現象として指定できるものである。

こうしたまなざしも都市社会側からの特徴的なひとつの農山村社会に対する見方ということができる。つまりそこには現実的な農山村の状況に対する把握の指向が欠けており、多様な要素が捨象された画一的な視線であるという点である。Ｉターンしたが移住先に馴染めず、また都市社会へとＵターンしていく者の姿はこうした一面を物語るシーケンスとなろう。

これらの単一的見方は現在、反省的に修正される動向は多少見られるところである。しかし、大局的に見れば、やはり大きな流れの方向は変わっていないと見るべきであろう。ではこうした見方に決定的に欠けているものは何なのであろうか。端的に言えば、それは農山村をあるがままに理解しようという意志の欠如であろう。多様な状況を多様なままで受け止めようとせず、単純なフレームを当てはめることによって多様性の存在を欠落させてしまうところにある。こうした対象理解の不完全さが現在の問題状況の解消に向けての試行に行き詰まりをもたらしていると考えることができる。

こういった対象理解に向けての試行の欠落の一端を補う志向性をもって試みるのが以下の論である。そこでは対象理解において欠落している要素のなかでも、そこに暮らす人々の心性に触れることを試みている。勿論、対象理解の上で重要なのは生活者のメンタリティに触れることばかりではないので、理解の上で必要な他の構成要素からも対象の像を構築

していくことができればとよいと考えている。

2 近代化と農山村の変容——徳島県木頭村の経験から——

2-1 ダム問題の村

現代農山村社会における社会問題は多岐にわたる。ここで採り上げる徳島県のある農山村もこうした例から外れるものではない。ただこの村が他の大多数の農山村と多少なりとも違う問題点があるとすれば、それはダム問題である。この村には、ダム建設に揺れながら、30年以上に渡る星霜を重ねてきた歴史性がある。

全国には2500以上のダムが存在しており、このようなダム問題に頭を抱えてきた地域は他にも存在してきた。ダムのような巨大水利施設が設置される際、その主体的働きかけをするのは、大抵の場合、地元地域社会ではなく都市社会側であることが多い。これはどういうことかと言えば、水利施設によって集められた水を主に利用しているのは都市社会側であり、いうなれば、受益者としての都市社会側が、地域の資源を提供せよと地域社会側に迫っている場合が大半なのである。

しかしこれは現在の状況であって、過去においては、補助金や、地域振興、過疎対策などの甘い香りを持った補償交渉に乗せられてしまい、ダム建設を容認してきた地域社会もみられる。

そうした地域では、建設されたダムとの折り合いをうまくつけて、地域の再生を図った例もみられる。しかし、ダム建設によって地域が分裂し、挙げ句の果てに村が崩壊し廃村へと追いやられ、追い払われるように移転したその先でも地域になじめずという光景はダム問題で死滅した地域の例であり、こうした事例は決して少ないとはいえない。さらに、泣く泣く住み慣れた生活の場を後にし、移住していったが、遅々としてダム建設が進まないという状況を後に突きつけられた旧住民が、かつて反対していたダムの建設を推進することを望むようになるといったような複雑な結末を招いている地域も実際に存在しているのである。

ここで採り上げる徳島県の一農山村は、こうしたさまざまなダム建設地の事例やこの村自身の経験を顧みた結果、「ダム建設反対」という方向で進んでいこうとしている村である。実質的な地域社会の推進力となるところの村行政、その首長たる村長が、「ダム建設反対」を明言し、そうした方向へ進んで行こうとしている地域である。

だが、こうしたダム反対の態度は、一枚岩の「反対」というものではなく、さまざまな

要素を含みながらの総体としての反対としてある。そこには重層的な農山村社会の諸相が存在しているのである。ダムについての経験を様々な形で重ねてきたその末に現在のような様相を呈しているのである。その原初的経験を辿ることから、一農山村社会像の彫刻への道程を開扉したい。

2-2 フィールドの定位

かつて“林業王国”といわれた、那賀奥。

四国徳島県的那賀川上流部には木頭林業で栄えてきた歴史がある。“木頭杉”としてその名を全国に知られている木頭林業の歴史は白鳳年間（670年頃）に遡る。大阪城の築城用材などとしても搬出されていた杉材は、山林から切り出されると、川に流されて下流域に運ばれていた。その川が那賀川であった。那賀川は流域に多雨地帯を抱えており、さらに急峻な地形と相まって、四国でも有数の暴れ川といわれている。この那賀川にダムを建設する計画が持ち上がった。細川内ダム計画である。

事の起こりは昭和31年の徳島県那賀川第二次総合開発計画に端を発する。昭和42年の徳島県議会の知事の答弁で、この計画が表面化した。建設省は昭和47年、木頭村大字西宇にダム建設の実施調査を行うと村民に対して正式発表した。

この那賀川最上流部に木頭村は位置している。

徳島県那賀郡木頭村。徳島県の最南西部、那賀川最上流部に位置するこの村は典型的な中山間地域の一農山村を形成している。剣山山系の南側にあり、夏期の季節風による降雨が多く、温暖多雨の気候で日本国内でも有数の多雨地帯である。年間降水量は3143mm（昭和60年～平成6年平均値）にのほり（日本の平均降雨量約1800mm）、一日の降雨量が1114mmに達したという記録を持つ。山が急峻であるため、自然村是那賀川の沿川域と山腹の平坦な地域に形成されてきた。現在は村の中心部を東西に貫流する那賀川に沿って、主要集落群が形成されている。現在の木頭村は数回の統合、分割を経て昭和32年に誕生している（助、出原、和無田、南宇、西宇、折宇、北川の7大字を含む）。

人口2045人、803世帯（平成9年3月現在）。昭和40年時点での人口は4115人であったが、村の東端にある小見野々ダム工事（昭和43年完成）関係人口の増加と減少の時期を挟んで減少に転じていった。昭和60年から、平成2年までの人口減少率は4.7%。高齢者率は、昭和60年に17.1%であったのが、平成2年には21.2%に上昇し、その時点の予測で、平成12年には35.1%、平成17年には39.9%になると見積もられている。平成7年における65歳以上人口比率は26.4%となっている。これらの数字が示しているように、高齢化、過疎化に苦悩

する典型的な一農山村である。

村総面積は23344haで徳島県内で阿南市に次いで2番目に広い面積を有している。土地利用状況は木頭村総面積23344ha中、森林原野22842haで約98%を占め、その94.2%を民有林が占める。農用地106ha（田17ha、畑24ha、樹園地65ha）。農家数と農家人口は減少傾向にあり、昭和55年の305戸、1208人から、平成2年247戸、868人へと、10年間に各19%と28%減少した。特産物は中山間地域の自然、地形的条件を活かした「木頭ゆず」であり、年販売額は約3億円である。

産業構造は、公務員、建設業がメインであり、かつて主要産業であった木頭林業の就業人口率は低下している。その他、農業、水産業、観光業、商工業などがある。

木頭村は徳島県の最南西部に位置し、徳島市までの距離は96kmであり、徳島県南部地区の中心都市・阿南市までの距離は70kmある。徳島県の県境に位置するこの村は高知県境に接しており、高知市までの距離は80kmで徳島市までの距離よりも近い。高知空港まで自動車で90分で到着でき、ここから東京、大阪伊丹、大阪関西、名古屋、福岡につながる便利な位置にあるという一面も併せ持つ。

木頭村の中央部を東西に貫流する那賀川は、剣山を源流として紀伊水道に注ぐ、流域面積874平方km、流路延長125kmの一級河川である。流域には2市6町2村（木頭村、木沢村、日和佐町、相生町、鷺敷町、羽ノ浦町、那賀川町、小松島市、阿南市）があり、流域の人口は1995年の時点で約92000人である。那賀川には3基のダムが設置されており、河口から45kmの位置に川口ダム、65km上流に長安口ダム、80km上流の木頭村の入り口地点に小見野々ダムがある。長安口ダムは上那賀町に設置されている多目的ダム（洪水調節・発電・灌漑）で、川口ダムは発電・逆調節、小見野々ダムは発電目的のダムである。

これらのダムのさらに上流部の木頭村大字西宇に建設が計画されているのが細川内ダムである。この細川内ダム建設計画を巡って、過去30年近くにわたって様々な論争を繰り広げてきているのである。

2-3 農山村生活の近代化

32年前の昭和31年、徳島県は「那賀川第二次総合開発」を明らかにし、そのなかで初めて「細川内ダム」という言葉が登場する。この時期、すでに木頭村より下流では第一次総合開発計画による長安口・川口ダムの建設が始まっていた。

「那賀川第二次総合開発」では小見野々・細川内の両ダムが計画されていた。

当時の新聞では「電源の宝庫那賀川上流」「絶好の電源開発地点」「電源開発の好条件

を備えているのは那賀川上流だけ」「各地の新設工場の電源需要に応じるためにも早急の着工が必要」⁽¹⁾といった類の表現が頻繁に用いられている。これらからも分かる通り当時の社会情勢として、都市部の産業伸長・拡大に伴う電力需要の増大に応えるため、早急な電源開発を要望する社会的要請があったこと、その電源開発の好適地として那賀川上流部が挙げられていたことを読みとることができる。

早急な電源開発を迫られるという社会情勢のなかで、急速に注目されるに至った那賀川上流部。その開発に名乗りを上げたのは、県・四国電力・電源開発会社であった。三者が「競争の形」⁽²⁾で開発計画をプランニングし、水利権を申請していた。

那賀川が利水・電源開発の好適地として突然の脚光を浴びる以前、那賀川上流域の丹生谷地方はその後進性から差別的なニュアンスも含んで“阿波のチベット”と呼ば慣わされていた。例えば、当時の一帯の状況は次のようなものであった。交通事情についていえば、小型自動車がやっと通れる道があるくらいで、その道も上那賀町の途中までしかなく、それより先は自動車が通れる道はなかった。小型自動車が通れるといっても、雨が降ると通行止め。カーブを切り取って待避所をつくり、バスが通るようになって、ストップ続きで手を焼いたという。

こうした交通状況は昭和30年前後に革命的に変化するが、この急激で多大な変化をもたらした一つの要因となったのが第一次那賀川総合開発による那賀川上流域の交通網整備であったのである。那賀川総合開発による長安口ダム建設により、ダム建設資材搬入・搬出のための国道改修工事や周辺道路網の整備によって、山峡の交通網が急激に整備され、交通環境が変化したのである。特に国道改修（徳島―木頭―高知線）による交通事情の変容は大きな意味を持っていた。

交通網の整備を促した要因はもう一つあった。それは昭和20年代に端を発する木材ブームである。もともと豊富な天然森林資源を抱えており、近世阿波藩の時代から、木頭林業として名を馳せていたこの一帯の森林資源が注目を集めた。この森林資源開発のための林道網の整備が、木材ブームという追い風を受けて急速に推進された。那賀川開発による国道改修工事と同時期に始まった奥地林道工事や、昭和31年の森林開発公団による剣山開発林道の着工などによって、国道周辺のみならず、幹線からはずれる枝葉の交通網の整備も行われることになったのである。那賀川開発による交通網整備が、主要幹線を担当したとすれば、木材ブームによる林道網整備は、それからはずれるローカル線の拡充にあたっ

⁽¹⁾徳島新聞昭和32年5月3日付「電発の那賀川開発」

⁽²⁾徳島新聞、前掲

たということができよう。林道網整備は那賀川開発による主要幹線交通網整備とほぼ時を同じくして進行していった。

那賀川上流域丹生谷地方の急激な交通網整備。その経緯を概略的にまとめれば次のようになるだろう。電力・木材の需要増大にともない、新たな資源開発の必要性が説かれるようになった。そうした社会的要請を受けて那賀川開発・山林開発のプランが立ち上げられ、その開発計画の一環として国道改修・林道網整備などが進められた。そしてさらにいえば、交通網拡充を促すファクターとして、電源開発・木材ブームという二本立ての社会現象があり、それが時間的にほぼ同時期に重なっていたことが、相乗効果的に作用して急激な交通網整備を促進したとみることができるのである。

こうした交通網整備という社会資本整備はその他の社会資本整備を促進することにもつながった。そうした流れは山峡の人々の生活環境に大きく、急激な変化をもたらし、その暮らしを変貌させている。

木頭村北川地区是那賀川の最上流部にあたるが、昭和36年当時、蔭地区で48戸中、31戸に電話が設置され、13戸にテレビ、4戸に電気冷蔵庫が所有されており、電気洗濯機は軒並みそろっていたという。あわせて約160人という北川小、中学校にも、図書室に17インチのテレビが設置されていた。昭和29年にバスが通るようになり、自家発電を四国電力に切り替えたのが昭和32年1月、この年の暮れに電話が通るようになった。

自家発電の頃の電灯は「『トウガラシより赤かった』。明るさなどというものではなくてちょっぴり赤いだけだった」「ラジオはどうにか聞けても、昼間はいっさい停電」⁽³⁾であったという。ヒエ・アワ・ムギ・トウモロコシ・イモが主食で、タンパク源はイノシシ・ウサギ・キジ・ムササビやアメゴ・アユなどのほか塩サバ・アジの干物くらいであった。それが魚屋が毎日庭先までやってくるようになり、商店に出掛けても、「電気冷蔵庫のなかから肉でも魚でも出してくる」⁽⁴⁾ようになった。

昭和35年2月からは北川校で完全給食が始まっている。

こうした例から読み取れるのは、急速な交通事情の変化に付随して、電気設備や通信設備などのインフラ整備が進められ、同時に電気製品や商品などが流入して、人々の生活環境が急速に変化していった姿である。こうした暮らしぶりの急速な変容は、先に述べたような交通環境の変化を抜きにしては考えられないものであったろう。

⁽³⁾徳島新聞昭和36年1月6日付「変わる山峡 那賀川上流2」

⁽⁴⁾徳島新聞、前掲

3 風景の変貌——近代化の生活史——

3-1 木材ブーム

ここで農山村を大きく変えたひとつのファクターである木材ブームについてみておこう。木材ブームは昭和28年に始まっている。1才10円だった木材価格が、20円、25円、30円とうなぎ登りに上昇し、7年間上昇し続け、40円を突破した。山林の資産は急騰し、林業関係の仕事はつきることなく、山主や山林労務者の収入が急増した。土木工事や山林労務のため他の地域から那賀川周辺にやってきた労働者達のなかには「仕事はなんぼでもあるし、こんな住みよいところがあるとは知らなんだ」⁽⁵⁾とって住みつく人もあった。

木頭村を初めとする上流部の農山村の暮らしぶりが激変を遂げる要因のひとつがこの木材ブームであった。当時の典型的な暮らしぶりは以下のように語られる。

「小さい時から私は、父と一緒によく山へ行きました。山小屋で寝泊りし、原生林を切り倒して焼き畑にし、ヒエやアワなどの穀物を作り、それを主食にして、父は9人家族の生活生計を立てておりました。ですから、店から買う物は、「イリコ」と「塩」ぐらいであとは全部、母が、味噌、醤油、漬物などを作っていました。そのほか、自然林でのシイタケ栽培、ミツマタの生産、炭焼きなどもやりましたし、山育ちですから、どんな大きな木も平気で切り倒し、20才位になりますと、山仕事を一人で請け負い、木材の伐採や搬出、植林など、割合自由な立場でものが言え、行動することができました。」⁽⁶⁾

このような暮らしぶりは木材ブームを挟んで一変する。まず、木材ブームにより地域経済は活発化し、経済的に潤沢化した農山村社会は、急激に肥大した資本を投下して、この地域のインフラ整備を急速に促すことになった。交通網整備やバス路線化、電力設備の普及、電話の普及などが進展した。これらの交通網・公共交通機関網や電気通信網の整備といったインフラ整備は、流域住民の生活環境を変貌させた。

また、それまであまり貨幣経済活動のない生活スタイルであった個々の住民の暮らしぶりにもわかに貨幣経済化し、さらにその当初から木材ブームの影響で経済的に潤ったもの

⁽⁵⁾徳島新聞昭和36年1月5日付「変わる山峡 那賀川上流1」

⁽⁶⁾木頭村での聞き取り（平成9年5月）による

であった。流域住民の生活空間のなかにはテレビ・電話・電気洗濯機・電気冷蔵庫・電気ゴタツ・電気釜などの電化製品が流入するようになる。新しく生活空間のなかに流入してきたこれらの近代的道具は、従来の生活様式を変容させるに余りある力を備えていた。例えば、交通網の整備は食品の流通を促進し、電気冷蔵庫は食品の長期保存を可能にして食材の変化を促したが、これによって食生活の様式を大きく変貌させている。当時の食材・食生活の様式は「ヒエ・アワ・ムギ・トウモロコシ・イモが主食で、タンパク源はイノシシ・ウサギ・キジ・ムササビやアメゴ・アユなどのほか塩サバ・アジの干物くらい」というものであった。それが魚屋が毎日庭先までやってくるようになり、商店に出掛けても、「電気冷蔵庫のなかから肉でも魚でも出してくる」ようになり「ダイコン、ネギ、山イモまで町からくる」⁷⁾ようになっている。

しかし、流通の発達・長期保存技術の流入による影響は食材・食生活の様式の変容だけに止まるものではない。その影響は食生活の様式に関わる全ての日常的営為の様式にも及んでいくのである。例えば、丹生谷地方では伝統的な焼畑農業があり、ヒエ・アワなどを栽培していたが食品の流入により焼畑農業が衰退している。また、以前のタンパク源である山林に生息する動物の狩猟は入手の不確実なものであったが、冷凍の食肉や魚という入手確実性の高い食品流通環境の出現により、狩猟も廃れていった。これらは新技術の流入にともなう食生活の変容に起因する、生業の変化の一例である。こうした生活様式の変化は農山村社会の産業構造の変化をも誘発することになるのである。

生活様式の変化は産業構造の変化をもたらしただけではなかった。狩猟の例で見てみよう。

「20～30年前までは山の生き物をよう食べとった。ウサギ・ムササビ・シカ・タヌキ・シシなんかをなあ。鳥じゃったら、スズメ・ヒヨドリなんかを食べとった。今ではあんまり食べんようになったの。ムササビなんかはコブテン（小動物を捕獲するための仕掛け）を使つての。コブテンちゅうのは針金の片方をわっかにして、ほいてもう片方を木の枝に引っかけとくんよ。これを山仕事のついでにしかけるんよ。ムササビ捕るときもおんなじもんを使う。じゃけんど、こんどは枝に引っかけるんやのうて、手で持っとくんよ。ほうして、ムササビの居りそうな洞（木の幹の穴）の入り口のところに（仕掛けを）構えといて、顔出すのを待っとくんよ。顔出してわっかをくぐったらすっと引っ張るとムササビの首が締まるけん。ムササビは鳥肉みたいな味がしてう

⁷⁾徳島新聞、前掲

まかった。こまい（小さい）頃はほうやってよく捕まえにいったもんじゃ。山か川く
らいしか遊ぶところがなかったけん。しも（下流域）から魚でも肉でも入ってくる
ようになってからはあんまり捕らんようになったが、時々楽しみで捕りにいった。」

(8)

都市社会からもたらされた技術革新は、食生活様式に影響を与え、食生活様式への影響は狩猟の在り方にも及んだ。つまり、狩猟という営為に対する意味付けに変化が生じているのである。

一連の流れはこうである。長期保存技術によりタンパク質系食材の供給手段のなかで狩猟の占める割合が低下してくる。狩猟によるタンパク源の獲得の必要性が薄れてくるのである。結果的に職業的狩猟は衰退する。しかし狩猟活動が全て廃れてしまうわけではなく、継続している。だが同じ狩猟活動であっても、その意味合いが従来とは異なってくるのである。従来の狩猟活動は生活必需物資獲得のための狩猟という性格の強いものであった。確かに、生活必需物資獲得のためだけではなく遊興的性格も併せ備えてはいた。しかしそれが全体に占める割合は低いものであり、それよりもむしろ食材供給という逼迫性を色濃く持っていたのである。このバランスがシフトしていったのである。生活必需物資獲得活動としての狩猟という意味合いの割合が低下し、遊興的活動としての割合が高まってくるのである。狩猟の絶対数自体は減少していったが、狩猟が持つ意味合いのなかでの遊興的性格は増大していったのである。

人々の営為の変容、それにともなう意味内容の変容を林業をめぐる領域の例で考えてみよう。

林業総体としてみれば、経済成長によって引き起こされた木材ブームの影響で林業・製材業・木材運送業などでは急速に発展していったのであり、伝統的林業システムは近代的な林業システムへと転換していった。木材を川の流にらせて下流に流す一本流しはトラックなどの陸上運送にと取って代わられている。山林での作業もチェーンソーなどの道具の導入による機械化や架線集材技術の導入などによって伐採作業過程も変化している。また国家主導のもと進められた「拡大造林政策」により、育苗過程や育林過程も大幅に変化していく。諸過程で行われる作業の内容も変化している。

また、都市社会の論理で進められた中山間地域の開発は、農山村社会に急激な貨幣経済への移行をもたらした。更に豊富な木材資源の対価として農山村にもたらされた現金収入

⁽⁸⁾木頭村での聞き取り（平成9年8月）による

は農山村の生活風景を一変させるのである。

木材ブームによる原木価格の高騰で木頭一帯は急速に潤ったが、これによって住宅を新・改築するものが急増し、電化生活化した。若者達がカメラをぶら下げてオートバイを飛ばすという姿が見られ、農閑期に県外旅行に出掛けるという余暇の過ごし方が現れている。

こうした変遷過程のなかで次のような例を中心にみてみよう。

山峡の林業地帯の多くは伐採した木材を下流に流す技術としての筏流しを発達させてきている。ダム建設により、河川の流れが分断されることによって、筏流しは衰退の途を辿ることになる。木頭では伝統的な林業スタイルのひとつとして、一本乗りが行われていた。一本乗りとは筏流しではなく、河川に一本一本バラバラに原木を流して下流域まで流す管流（かんりゅう＝くだ流し）という方法である。川の流れを堰止めて、そこに伐りだした原木を貯木しておき、その堰を切った勢いで、原木を筏を組まずに流すというものである。一本乗りでは最後尾の丸太に筏流しの専門職人が搭乗し、途中で岸や浅瀬、岩などに引っかかっている丸太をトビグチという道具で流れに戻してやりながら川を下って上那賀町小浜まで運んでいくというものである。一本乗りは、河川幅が狭く、急流である那賀川上流域という地理的条件のもとに発展した木材運送技術であった。

専門技術を要する一本乗り職は、林業を基幹産業としていたこの中山間地域の農山村では、粹な職業であると認識され、憧憬の対象として存在していた。一本乗り職人が、丸太を流して下っていった先の下流域で、受け取った代金を賭博などに派手に使ったという噂などが話題になっていたのも、そのことを示す一つの証左である。専門技術を身につけ粹な姿で川を下り、羽振りの良さで衆目を集めた一本乗り職人は農山村社会でのひとつのステータスシンボルであった。このシンボルはダム建設などに伴う河川の分断による筏流しの消滅によって凋落する。こうして農山村社会の志向性の対象は消滅したが、そのことは即座に志向性が潰えたことを意味するものではなかった。つまり、志向の対象の矛先が別の方向へ向かうという、志向対象の置換現象が生じたのであり、志向性自体の消滅を招いたわけではなかったのである。例えば、それは家の新改築、カメラ、オートバイ、自動車、旅行などに分散・移行していったのである。この力学によって農山村社会の精神文化は少なからぬ影響を及されるに至ったのである。

一連の流れは都市社会の論理による農山村社会への開発の影響が、具象的な面だけに止まらず、社会通念などの抽象的精神文化にまで波及した、とまとめられよう。

3-2 風景の変容と環境認識

一連の変化は風景の変容として捉えることができよう。ここで風景とは人々の行為、その行為を生み出すモノ、行為の結果生み出されるモノ、与件などの主体が認識する対象の総体をいう。

与件として存在しているモノは山や川、空などの地形的要素、雨、雪、寒暖、乾湿などの気候的要素、そこに生息する動植物など主体の内外に存在する全自然条件である。⁽⁹⁾与件としての自然条件に対して主体は基本的に干渉の埒外にあるという性質を持つ。⁽¹⁰⁾

与件として存在しているモノは主体の認識の対象となるが、ここで自然的条件としての与件は物質がある状態で存在しているという物理的實在に還元されうるという側面を有していることを確認しておかねばならない。例えば、川は水という物質が液体の状態で流動している状態のなかに様々な物質から構成される生物（魚・水棲昆虫・水棲植物など）が活動している物質と運動の物理的世界としての認識構成が為されうるのである。自然科学的観点からすれば、このような世界認識の在り方は別段、矛盾を来していないが、日常生活的観点からすれば、それは大いに違和感を孕んだものと感受される。我々は自己のまわりに存在している物理的實在に対して、様々な意味枠組みを当てはめ、有意味化を試行し、そこから様々な意味の断片の集積としてこれを解釈し、受容しているのである。物理的實在という日常的観点からすれば、ほとんど意味を為さない無意味の大海に対して、我々は意味枠組みという網をこしらえて海を掻き回す。そうすることによって意味を掬い取るという日常的実践を行っているのである。我々は世界を様々に分節化し、切り取った断片を張り合わせるカット＆ペーストという操作を介して認識しているのである。主体が認識し得るものとして、つまり有意味化されたものとして、世界から切り取られた時点で自然的条件としての与件が成立する。与件として切り取られた断片は風景の一構成要素となる。

⁽⁹⁾主体の内外というのは主体の外部に存在するモノだけが自然的条件としての与件の要素であるだけでなく、主体自体の内部にも与件として基本的に主体が干渉できない部分が存在しており、これを主体内に存在する与件として捉えるという認識のもとにあるということである。例えば、人間を自然的条件のなかで発生した生命体として自然的条件のひとつの要素と捉えれば、主体と自然的条件は一致するのである。

⁽¹⁰⁾自然的条件に対する主体の干渉としては、例えば地形の改変や流路の変更、主体の活動の影響による動植物の棲息域の変容などという類のものが考えられる。厳密な議論の上では主体の干渉が一切ないものだけを自然的条件の要素としていくべきかもしれないが、ここでは認識論的観点から、主体の干渉が一切ないものでなくとも、主体が“自然”と感じるに異存のないもの、つまり主体が自然と認識するものは自然として扱う。

与件は他の認識対象と継ぎあわせられ風景を構成する。

主体に行為を促すモノとして概念や通念、知があるが、これらも社会的な空間のなかで各主体に流通しているモノとし、ひとつの認識対象としてその総体を精神的風景と位置付けることができよう。風景は主体の外部だけでなく、内部にも存在していると捉えられるのである。つまり風景とは主体内外に存在する環境に対する認識を指し示しているのである。

環境には主体の内面が反映される。

例えば、大航海時代の幕開けの頃、南アメリカの先住民族達がスペインの帆船を見たときどのような反応を示したのか。それまでカヌー以外の船など見たこともなかった彼らは、水平線の彼方にあちらに一つ、こちらにも一つと立ち現れた白い影が少しずつ成長してくるのをどう理解すればいいのか、すっかり途方に暮れたという。こちらに向かって進んできているように見えるが、海からやってくるものといえば鳥たちと、大海原から生まれ変幻自在に形を変える雲くらいなものである。新石器から青銅器の文明段階にあった彼らにとって、海といえば、魚の漁場としての近海がほぼ全てであり、その外側に広がる海は意味をなさぬ世界であった。未知の世界からやってくる未知の存在に対して彼らが困惑の末に到達した結論は気まぐれな雲の悪戯というものだった。

ここでは彼らにとってそれまで知識の枠内でははみ出してしまうものに対して、その時点で持ち合わせていた知識を総動員して解釈し、新たな意味が構築されているのである。そこでは従来の意味枠組みでは処理できない新環境に対して、主体に内面化されているものを通しての意味付与という解釈作業がなされるのである。環境認識に関して主体の内面が大きく関与しているのである。

また、環境を認識することは同時に主体の内面認識にもつながることになる。環境を規定するとその規定された環境に対して主体自体も相対的に規定されるからである。

例えば先の例では、スペイン人と接触した先住民族達は、自分達以外の人間が存在しているのだ、という新たな環境認識を得て自分達の存在意味に新たな認識を付け加えるだろう。

主体は環境を認識し、認識された環境を通じて主体自体が再帰的に認識される。こうして認識された自己を通じて環境が認識されてゆく。こういった再帰的なループが主体と環境をめぐる認識のうちに存在するのである。したがって風景という環境認識は主体の自己認識を反映しており、その逆も言えることにもなるのである。

主体の外部に存在するモノが主体によって認識される際、主体はそれまでに主体内に蓄積されてきた知を総動員して、外部存在を解釈し主体内に取り込もうとする。この際しば

しば外部から新規の知を獲得することになる。こうして蓄積されてきた知と新規の知の融合によって解釈された認識が環境認識となるのである。この環境認識は生成されると同時に新規の認識の知として主体内に取り込まれ内在化される。

環境認識は社会空間において、主体の外部に自律的に存在し、かつ主体の内部に依存的にも存在しているという二重性を帯びているのである。

以上のような観点に立てば、当時の環境認識としての風景を検証することは当時の人々の自己認識を検証することに通ずるということが理解されるであろう。

さらに風景の変容という動的状態は、静的状態にあるときよりもその質的差異を示唆しやすいであろうことは論を待たない。

当時の丹生谷地方の風景はどのように変容していったのであろうか。

農山村社会の風景の変化は、交通網整備・巨大建築（ダムの堤体）・電力施設設置などの社会資本から始まった。都市社会側の都合によって資源保有地域として発掘されることにより、都市社会側から投資が為された結果である。インフラの整備は農山村の風景のなかにそれまでの農山村社会の通念からはみ出すものを忽然と出現させることになる。インフラ整備は建設資材や商品、木材などの物資の流通や、人夫や商人、観光客など人の流通を増大させ、都市社会との文物の流通を加速させる。都市社会からの文物の流入は建築物の変化・自動車の出現など、生活環境内の物質的外部風景の変化に現れる。物質的風景の変化は外部風景に現れるに止まらず、生活環境内部にいたり、電話・テレビ・電気冷蔵庫・電気洗濯機が出現という内部風景の変化に至る。こうした物質面での変化は生活様式に大きな変化をもたらす。先に見たように電力設備の整備や家庭電化製品の流入により急速に電化生活化している。自動車や発動機による機械化も同様に生活様式に変化をもたらす。電化生活化・機械化などは生活内の行動様式を変容させる。道具によって仕事内容が変われば、それに伴う様々な行動様式も変化する。例えば、発動機の導入によってそれまでの大型労働力であった牛馬などの家畜にとって代わると、家畜の世話という作業内容は消失し、新たな作業内容が発生するのである。家畜を洗ってやるために川岸まで連れて行ってやるという作業がなくなり、川との接触の機会が消失したりする。道具によって行為様式のコードが書き換えられるのである。生活環境の変化による生活様式の変化は仕事に関する行為様式だけではなく余暇や趣味といった嗜好様式にも現れ、カメラ・オートバイ・旅行という嗜好様式に変化が現れる。こうして仕事姿、出歩く姿、趣味、余暇の過ごし方などの行為的風景も変化する。行為的風景の変化はすでに観念的風景（社会通念・精神文化・志向性）の変化を反映しているが、行為的風景の変化は更に観念的風景の変化を促進する。

こうして引き起こされた観念的風景の変化は、行為的風景・物質的風景に逆に働きかけ、変化を催していくのである。変化した行為的・物質的風景は再度観念的風景に働きかける。こうして相互に作用し合う循環が発生するのである。

こうした相互作用の循環を巨視的なパースペクティブを持ってみれば、全体として自律的なシステムを形成していると映るのである。

3-3 吸収される近代

以下にこれまでのことを整理してみよう。

都市社会の近代化の波が緩慢に近代化の進んでいた農山村社会の近代化を急加速させる。

都市地域で進展した産業化・都市化によって電力需要・木材需要などが高まる。電力需要・木材需要の伸展という社会的要請のなかで電源開発ブーム・木材ブームが引き起こされる。電源・木材資源の供給地として中山間地域が浮上する。農山村社会に都市社会側から資本が投入され、農山村社会の社会資本の整備が急速に進む。都市社会資本投下・木材ブームにより、農山村社会に急激に大量の貨幣が流通するようになる。農山村社会の貨幣経済化が急速に進む。都市社会にとっての資源を豊富に保有していたため、その対価として流通した貨幣は農山村社会を経済的に潤すことになる。自給自足社会体制から急速に貨幣経済的社会体制へ移行すると同時に、経済的に潤うことになった。これは近代化の過程としては一般的ではなく、例外的な状況のようにも映るが、この時期山林資源・水資源を抱えていた農山村では同じような状況があったと考えられる。

急激に貨幣が流通し潤った農山村社会へ都市社会から様々なものが持ち込まれる。農山村社会の生活空間のなかに都市社会からもたらされた道具が急速に流入する。道具は生活環境を変え、生活様式を変える。生活様式の変貌は産業構造や経済構造の変貌の誘因となる。農山村社会の様々なレベルでの変貌を引き起こされているのである。こうした過程は農山村社会の風景の変容というパースペクティブからの照射によって相対化されよう。都市社会からの流入は農山村社会の風景の変容を引き起こす。風景の変容は物質的風景・行為的風景・観念的風景の様々な局面で引き起こされる。各局面での風景の変容は他の局面に影響を及ぼす。それぞれが相互作用して影響を与え合っているのである。ここにおいて、相互に作用し合いながらも全体としてひとつの均衡を保った自律的システムとしての農山村社会像が浮かび上がる。しかしここでは飽くまでも「自律的システム」であって、「自律システム」ではない。農山村社会は都市社会からの刺激に対して鉄壁ではなく、いとも簡単にその刺激を受け入れるからである。都市社会からの刺激を受けて、農山村社会はそ

の内部で様々な変質を経験することになる。他の社会からの影響によって自らの内部で変容を遂げる「自律的システム」としての農山村社会の姿がそこにはある。

しかし刺激を受け入れながらも都市社会の論理に全面的に同化させられてしまうのではない。農山村社会が都市社会の論理によって都市社会の縮小版になってしまうわけではないのである。変容はあくまで農山村社会の内部でのものであり、都市社会への変身ではなく、農山村社会内の変容なのである。そこには都市社会から投げ入れられた網の目を時として巧みにすり抜けていたり、紡ぎ直したりする社会像がそこに見え隠れしているのである。

こうした状況を整理してみると、都市社会によって投げ入れられた石の波紋を吸収していく過程として農山村社会の変容を見ることができるのである。

このような変化がダム建設表面化前後の丹生谷地方那賀川上流域では起こっていたのである。

4 おわりに——地域社会再生のために——

ここに試みられた近代化黎明期の一農山村の社会像の析出は、一農山村に特化された例に過ぎないかもしれない。だが、急激な近代化のうねりにさらされた農山村のいくつかはここに示されたようなタイプの道程を辿ったかもしれないし、そうでなくともこのような例がそうした農山村社会を客体として理解しようと志向する場合、その一助となる可能性はある。

こうした対象理解の試みをより重層的で、多様な社会の理解に繋げ、地域社会における社会問題の分析にとって有用な道具としていくためには2つの方向性が考えられよう。ひとつはここで試みた一時期の農山村社会像の理解を手がかりとして現代につながる通時的な農山村社会の理解という方向性。これを縦の糸と考えると、横の糸としてある共時的な方向性、つまり他の地域の農山村社会の理解への手がかりとしていくという方向性が、もうひとつの方向性ということになる。縦の糸と横の糸がうまく織りなされていくことでより深みのある理解の可能性が出てくるのである。また、ここで試みられた人々の心性と社会像の往復は第三の方向性として、高さと捉えることができる。縦、横、高さが揃えば立体的な理解への可能性が開扉されるのである。

また、いまひとつの手がかりとして次のようなこともいえる。ここで取り扱ったように農山村社会の問題は、都市社会を抜きにしては語り得ないという状況が現代の農山村社会の特徴的な一側面である。その逆に現代都市社会を語る上でも農山村社会との関係性を欠

いては語り得ない部分も出てきているのである。こうした相互関係性に注視することはとりまなおさず、都市社会の更なる理解という契機を内包していることになるのである。

参考文献

- 阿波学会 『総合調査報告—木頭—（郷土研究発表会紀要第16号）』、徳島県立図書館、1970年
落合洋文 『環境とは何か—内なる世界と外なる世界の調和を求めて』、ナカニシヤ出版、1996年
山林協賛会 『徳島県木頭の林業（複製版）』、1935年
徳島県那賀郡木頭村 『木頭村誌』、1961年
徳島県自治問題研究所 『ガロの住む川—細川内ダム問題を考える本—』、1996年徳島県
鳥越皓之編 『環境問題の社会理論—生活環境主義の立場から』御茶の水書房、1989年
鳥越皓之・嘉田由紀子編 『水と人の環境史—琵琶湖報告書（増補版）』、御茶の水書房、1991年
農村統計協会編 『図説農業白書 昭和50年度版』、農村統計協会、1976年
有木純善 『林業地帯の形成過程—木頭林業の展開構造—』、日本林業技術協会、1974年

（いど さとし・博士後期課程）

Scenery of Modernization : Regional Sociology of Enviromental Cognition

Satoshi IDO

The present-day rural mountain society holds a lot of social problems to be too difficult to resolve, for example, agricultural and forestry problem, successive problem, regional medical problem, underpopulated problem, a gap between urban and rural standards. A large number of attempt to solve these problems, though, has been practiced so far by various position, ex. administrative organ, most of it has not reaped the fruit. This results from the insufficient understanding of these problems, espicially, about the mentality of inhabitants.

In this paper, an environmental issue about building dam in Tokushima pref. is reconsidered, from the point of view of inhabitants' mentality that is lack in many of former studies, and the social image of rural community is reconstructed from same standpoint.

In this process, especially, the age of modernization of this region is the focus of attention. Generally, rural communities seem to have been submitted by modern impact with no resistance, yet in fact, there were scenes where inhabitants manipulated the adoption of modern cultural things in various fields. These scenery lead the image of person who, when one comes across the unknown scene, gives meaning or concieves new meaning from experience. The domestication of modern culture is the one of significant factors on the reconsidering the modernization in rural communities.

From these images of rural community that has been paid no attention to by many position or former studies, rural communities are imaged as an autonomous society.